グローバル・スタンダードの言葉の力を身につけるには

●日本教育大学院大学　北川達夫

私はフィンランドで国語の教科書と教材の作り方を学んだ。もともとフィンランドに住んでいたし、そこで教育を一から勉強したのだから、私としてはごく自然なことだった。だが、日本人はもちろんのこと、フィンランド人にも聞かれたものだ。

「フィンランド語と日本語は違うのだから、フィンランドで国語教育を勉強しても日本では役に立たないんじゃないの？」

確かにそれは否定できない面もある。しかし、私は外交官としての経験から、言葉の運用能力には、言語の違いを超えた「何か」があることを確信していた。英語はネイティブ並みなのに、その「何か」が欠けているために外交現場では役に立たない同僚を見るにつけ、確信を強めたものだ。それは実に根元的な力であって、決して高度なものではない。だが、意識してはぐくまないと、容易に抜け落ちてしまう力であるらしい。

ＰＩＳＡの読解力調査においては、同一の問題が各国語に翻訳され、各国の子どもたちは各国語で受検するが、その回答は同一の規準で評価される。この調査で求められているのは、まさに言語の違いを超えた力といえるだろう。どの国で学ぼうと、同じ力が求められているからだ。これこそ複雑化・多様化・グローバル化する世界で生きるための「言葉の力」である。その力を、自国の国語教育でどのようにしてはぐくむかが問題なのだ。

今回の三省堂の教科書教材作成にあたっては、フィンランドのみならず各国の国語教科書を参考にして、すべてに共通する理論と方法に留意した。そのうち、特に強調したいのは次の二点である。

だれでも使える教科書教材であること

いまＰＩＳＡ型読解力を現場で実践するというと、熱心な先生たちが勉強と研究と研修を重ねに重ねて、ようやくできるかどうか――といった観がある。とにかく大変なのであ

1年「いぬの　きもち」

2年「きぜつライオン」

きたがわ　たつお
1991年～1998年，在フィンランド日本国大使館在勤。退官後，フィンランドで「母語と文学」科の教材作法と教科教育法を学び，日本とフィンランドのほか，各国の教科書や教材制作に携わっている。

る。もちろん勉強や研究や研修を重ねるのはよいことだ。だが、現場の過大な努力と労力が前提となっているようでは、全国津々浦々にまで普及と定着を図るのは難しい。そこで、だれでも簡単に実践できる教科書教材づくりを目指すことにした。

これについては、他の国でも事情は同じである。なぜなら、PISA型読解力はどの国にとっても新しい概念だからだ。たとえばフィンランドでは、多くの教科書出版社が「新任の先生でもベテラン並みの授業ができる」ことを国語教科書の最大のセールス・ポイントにしている。フィンランドの先生が特別に資質・能力に優れているわけではない。教科書の使いやすさが重要なのである。

指示と評価の明確化

PISA型読解力においては、児童にどのようにして意見を構築させるか、そして、構築した意見をどのようにして評価するかが常に問題になる。この点に関しては、次の三段階が、言語の違いを超えた、最低限の規準として共有されていると思う。

①考えを表明する。

②テキストのどこを読んで／見て、そのように考えたのか、テキストから根拠を挙げる。

③自分の考えと、テキスト中の根拠との関連性を説明する。

これまで、児童に課題に取り組ませる場合、複数の作業を一度にまとめて指示する傾向にあり、全体として作業指示が曖昧になりがちな部分があった。そこで、意見を表明させる場合は特に、前述の三段階を強く意識して、作業指示を明確にするようにした。「どう思った?」「どこを読んで／見て、そう思った?」「なぜ、その部分からそう言えるの?」というのが基本的な流れである。

これは作業指示の明確化であると同時に、評価規準の明確化でもある。すなわち、考えが表明できれば第一段階がクリア。テキストから根拠が挙げられれば第二段階がクリア。考えと根拠を関連づけられれば第三段階がクリアということだ。もちろん評価規準は段階に応じた設定が必要で、最初からすべてを求めるのではない。児童個々に応じた設定が必要な場合もあろう。だが、評価規準が明確であれば、それも困難ではないはずだ。まずは考えを表明し、テキストから根拠を挙げられるようになることが目標である。

意見構築の段階が明示されていれば、さまざまな活動が可能になる。たとえば、一人の考えを基にして、全員で相談しながら意見を構築する。あるいは、他者の表明した考えについて、自分がテキストから根拠を探し、考えと関連づける——等々。こういった協同作業においては、自分と他者の価値観の違いや、個々の知識の相互矛盾などが明らかになり、その調整を余儀なくされる。その経験を積み重ねることによって、ものごとを多面的に見る力が育まれ、より高度なクリティカル・リーディングへと進むことが可能になるのである。

3年「南の島へようこそ」

6年「宇宙時代を生きる」